

れづれ四卷吉野山花見の所に、歳は四十四五なる奥の按ずるに、此比は市中富商の妻をすむかしを今に兵庫曲をかしげに、略ぬり笠にめつきのくわんをうたせ、いたゞきなしに赤いしめ緒、よるづいやなるとりなり、此文にて兵庫髻のすたれたる、事明し、然れども天明の比までも、遊女には此風のこりて、上職のものらおほかたは、横兵庫ならざるはなかりしに、是も今は島田になりて、兵庫は影もみへずなりぬ

〔歴世女装考〕四横兵庫



此圖は、今弘化四年より五十八年前、寛政二年、家兄の作られたる物の本に、家兄自畫の圖を寫せり、天明、寛政の比、北廓の妓みな此髪なり、是を横兵庫といへり、

島田

〔書言字考節用集五股體〕島田シマダ髻ツグ今世今世賤賤所言
〔歴世女装考〕三島田髻の始原

兵庫の後、島田といふ結風おこる、此ふり慶長より明曆あたりまでの雜書どもには、名も圖もみえざれど、寛文の中ごろより起りしならん、万治二年板、淺井了意が作、東海道名所記、三卷大井川の條に曰、島田よりこゝまでか、れど、つひに歌袋の緒がとけぬといふ、馬かたき、て島田の事ならば、髪をゆふたる事をよみ玉へかしといふ、是に心つきて、はたごやの女はちりのつくも髪せ